

---

# 宝玉列伝 ～琳悠国史～

深山 雅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宝玉列伝 ～琳悠国史～

### 【Nコード】

N0358Z

### 【作者名】

深山 雅

### 【あらすじ】

この世界とは異なる異世界。そこは2つの大国と6つの小国から成る大陸が4つと、5つの島で成る『塔』とよばれる機関で成り立つ世界である。

この世界では国はそれぞれ1つずつ宝玉を持ち、その所有者が『王』となる。代々続く王家を持つ専制君主制国家もあれば、議会や民で所有することで民主制、共和制をとる国もあった。

これは、南の大陸『赤大陸』にある大国の1つ『琳悠国』での、ある人物の伝記である。

## 第0章 1 ある女性の苦しみ（前書き）

筆者の文章力が拙いので伝わりにくいかもしれませんが、時々流血・残酷表現が入りますので気をつけてください。

## 第0章 1 ある女性の苦しみ

「うつ・・・く・・・はぁ・・・」

薄暗い部屋の中で、苦しげな女性の声が響く。

広々とした無機質な室内には、寝台に横たわる妙齡の女性の他に人はいない。

豪華な寝台に横たわり、上等な絹の寝巻きを纏い、冴え渡る美貌を持った妙齡の女性である。

女性は額に脂汗を浮かべ、苦悶の表情で痛みに耐えていた。

「どうして、私が・・・こんな・・・」

彼女ははちきれんばかりに膨らんだお腹を憎々しげに睨んだ。

「どうして・・・こんな子を産まねばならないの・・・？」

それが己の苦痛に繋がることを理解しながらも、彼女は力の籠らない拳で己の腹を殴りつける。否、腹ではなく、胎の子をと言っべきか。

「くう・・・！」

弱々しい刺激ではあったが、彼女の陣痛を悪化させる効果はあったらしい。それでもその手は止まらない。

「なんで・・・どうしてよぉ・・・！！！」

## 第0章 1 ある女性の苦しみ（後書き）

初めての小説投稿です。

ちゃんと続けられるかは不安ですが、呼んで下さるとありがたいです。

## 第0章 2 地獄の始まり

彼女の名は美珊<sup>みさん</sup>。赤紫地方の大国であるここ、琳悠国国王の第6夫人である。

とはいえ、その地位や名誉を美珊が喜んだことは、ただの一度も無い。

彼女には既に幸せな家庭があつたのだ。優しい夫と可愛い息子。決して豊かではなかったし、生活も苦しかったが、溢れんばかりの愛情に包まれていた。

美珊と夫は共に旅芸人の一座に属し、自然と・・・いつの間にか愛し合うようになっていた。踊り子であつた美珊と、笛吹きの方。3つの息子も父親の真似をしてか笛を吹くようになり・・・ありふれた、けれど幸せな日々。

その崩壊は・・・呆気なく訪れた。

そもそもは、いつも通りの興行だった。街で芸を披露していたのがたまたま役人の目に留まり、一座は王宮に招かれた。

夜の宴の余興として、王に見せ・・・褒めの言葉まで頂いた。皆、光栄と感激に打ち震えたものだ。

王が、美珊を夜伽に所望するまでは。王は美珊を見初めてしまったのだ。

確かに、彼女は美しく魅力的な女性であつた。しかし既に夫も子もいる身。いくら王とはいえ、流石にそれは人道に悖ると、拒絶した・・・そして、その時から地獄は始まつた。

用意された部屋に一座共々戻つた直後、王の使者だという男より金子を賜つた。彼らは興行の代金だろうと、何の疑問も持たずに受け取ってしまう。

そのほんの数分後の事であつた。

王の私兵が部屋に踏み込み、盗人を捕らえると言ひ出したのは。捕まつたのは・・・美珊の夫だった。

それは賜ったものだ、盗んでなどいない・・・そう訴えても、信じては貰えなかった。否、始めから聞く気など無かったのだ。

何故なら、それこそが王の手であったから。始めから、美珊の夫に罪を擦り付けて彼女を手に入れるつもりだったのだろう。夫の無実を訴える彼女に自分のモノとなれと言い放ったのがいい証拠だ。そうでなければ、夫に死罪を言いつける、と。

それによく思い出してみれば、あの使者はその金子を美珊の夫に押し付けていった。一座の長が受け取ろうとしても、頑として譲らなかった。あの時点で気付けば良かったと後悔しても、もう遅い。

美珊は、諦めた。

相手は一国、それも赤紫大国の長であり、本当にそれだけの権力を持っている。

どうせ王は、幾人もの美女を後宮で囲っている。少し毛色の違う女が物珍しいだけだろう、ほんの数時間の我慢だ、彼の命には代えられない・・・。

地獄の一夜であった。けれど、夫のため、今だけの辛抱だと思えばこそ、耐えた。

まさか、『地獄の一夜』が『地獄の始まり』だったなどと、夢にも思わず。

王は美珊を本格的に気に入り、傍に留め置くことにしてしまった。そのために翌日、彼女の夫の首を落とした。

彼女の目の前で、窃盗の咎だと言って。

耳を劈くような断末魔の悲鳴、転がる生首、見開いた目、吹き出す鮮血、ゆっくりと傾いでいく軀。今でも彼女の脳裏に焼きついてる。

彼女の夫を殺すことは、ある意味では人質を失うということだ。それでも王がそれを行ったのは、他にも人質になり得る存在があったからだ。彼女たちの息子が。

あえて彼女の目の前で夫を殺し、言うことを聞かねば子供も同じ

目に合わせると脅したのだ。まだ、たった3才の幼子の首を、落とすと言う。

美珊に逃げ道は無かった。



## 第0章 2 地獄の始まり（後書き）

まだまだ序章です。

## 第0章 3 望まぬ生活

息子は地下牢へ、美珊は後宮へとそれぞれ留め置かれた。

美珊にとって唯一救いだっただのは、一座の皆が早々に解放されたことだろう。美珊やその息子に申し訳無さそうではあったが、彼女にしてみれば一座の者たちも大事な『家族』。無事を喜びこそすれ、恨むなどということは無かった。

息子がいるのは地下牢とはいえ、十分な食事も世話も与えられていると言われた。正直半信半疑ではあったが、仮にも人質なのだ。まさかそこまで無体な扱いは受けていないだろうと思った・・・思うしかなかった。下手に口出しして逆鱗に触れれば、目も当てられない。

そうして彼女は来暦2108年、琳悠国朱王朝第31代国主・朱班保はんほの側室、第6夫人となったのである。現在より2年前のことだ。嫁いでまず知ったのが、王が恐ろしいほどに無能な王だということだった。

長い歴史と大国ゆえの地力の上に胡坐を掻き、当人は遊興に浸り、興味を持つのは専ら酒宴や女ばかり。

これまで美珊たち一般の民が王が行っていると思っていた政は、全てその王妃のものだったのである。

無能な王と比べ、王妃は賢明な人であった。事実上の施政者は王妃であるのに、布令は王の名で出されていたのだ。政治のことなど美珊にはよく解らなかったが、少なくとも王のこの状態には、呆れて何も言えなかった。

そしてその美珊の生活は、世の女性がどれほど憧れようと到底叶えられないものではあっただろう。

豪華な後宮の一角に与えられた広々とした寝室、数を数えきれないほどの装飾品、色とりどりの絹の着物、食べきれないほどのご馳走、山海の珍味、傳く女官。

しかし美珊にしてみれば、そのどれもが吐き気がするほどの嫌悪感を齎すものでしかなかった。

装飾品も、絹も、何のためのものか。着飾って、あの憎い王を喜ばせるためのものではないか。

広い寝室は、何のためのものか。あの憎い王に抱かれる場所ではないではないか。

どんなに美味なものを食べようと、味がしないではないか。息子の安否も解らぬのに、こんな食事が喉を通るものか。

頭を下げ、平伏する女官達が内心で何を考えているのか、彼女は知っている。

実は彼女には、生まれつき魔力があった。とはいえ、魔法使いではない。『塔』で公式登録されていないし、正式に学んだことも無い。才能は充分なのにコントロールが上手く出来ていないせいか、時折周囲の人間の思念が流れ込んでくるのだ。

『所詮は下賤な旅芸人の出。』

『あの顔と体で王に取り入った。』

『薄汚い女だこと。』

王は己の体裁のために、周囲にはこう触れ回っていた。

旅芸人をしていた美女がどうしても希い夫を捨ててまで来たので、仕方が無く迎え入れてやったのだ、と。

嘘八百に過ぎないし、真実に気付いている者もいたろうが、そんなことに意味はない。

王と、後ろ盾の無い末席の側室。真実がどうであれ、どちらの言い分が事実としてまかり通るのかなど、火を見るより明らかだ。

それでも、彼女は我慢した。歯を食いしばり、拳を握り締め、寝台を涙で濡らしながらも、黙って従い続けた。いつの日か、王が自分に飽きることを願って。これまでも、そういった娘たちがいたと、噂で聞いていた。無理矢理娶られたが飽きられ、多少の慰謝料を貰って離縁された娘たちが居たことを。

その時を待ち、息子を連れてここを出ようと。

耐えて、耐えて、耐え続けた。

そして彼女の思惑通り、1年ほどで王は美珊に飽いた。

彼女は後宮のどの女性よりも美しく魅力的ではあったが、王としては、閨で笑うことも口先だけでも愛を囁くこともしない女よりも、そうした奉仕をしてくれる女の方が良かったのだ。

しかし・・・ようやく逃れられると思ったのも束の間、美珊は永久にこの後宮に留め置かれることを言い渡されてしまう。

それは、彼女が王の子を身籠ったからであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0358z/>

---

宝玉列伝 ～琳悠国史～

2011年12月1日22時56分発行